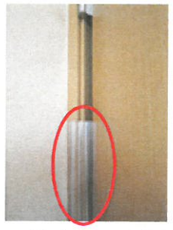
放課後デイサービスまごころでは主活動を行う部屋、おやつを食べたり、クッキングを行う部屋、自立課題や本を読む部屋と様々な用途によって使い分けています。

部屋を区切ることによって子どもたちが安心して過ごせるようにしているのですが、部屋が多いとその分ドアの開け閉めも増えます。その時にドアで指を挟んでしまうという事故がないように、このような対策をしています。

ドアが最後まで閉まらないよう、一番上の所に板を付け、指が挟まらないようにしています。



引き戸の場合は、隙間に手が入らないよう、専用のプラスチックを付けています。

しかし、このような対策をしているから大丈夫だ。と安心するのではなく、しっかりと子どもたちの動きを確認して過ごしたいです。そして、事故が起きてしまってからでは遅いので、これからも色々な対策を練って、子どもたちが安心して、楽しく過ごしていける場所にしていきたいと思っています。

楽しい遊び紹介～

壁に雨といのようなパイプをマグネットでとりつけて上からボールを入れるだけなのに実に楽しそう。

（ボストン子ども博物館）

デイサービス通信

お誕生会

9 月 1 日はデイサービスまごころの開所日、今年でようやく 3 年目を迎えることができました。9 月 2 日は利用者さんと一緒にアップルパイを手作りしてお祝いしました。

また 9 月はお誕生日が多い月でもあり、5 人の利用者さんのお祝いをそれぞれ行います。

9 月 9 日、Hさんのお誕生会の日の朝、台風の影響もあり、送迎を少し早める電話を差し上げたところ「デイサービスがお休みになるのかとヒヤッとした…」と言われました。

生花とキャンドルをテーブルに飾り、お赤飯と手作りケーキでお祝いします。「今月はまた何回かケーキが食べられるわね」とTさん。祝ってもらう人も、祝う人も特別嬉しい気持ちになれるのがお誕生会です。

みんなで記念撮影

心つれづれ

気丈な母の選択

「福祉の世話にはならん！」そう言い放っていた昭和の頑固オヤジのような母は、今、福祉に支えられて暮らしている。

父が亡くなった後、一人暮らしを十余年続けていた母が、体調を崩した。高熱が続き、救急車を呼び入院したのに、病気は一週間で治った。

「明日退院してください。」たかが一週間の入院で、母の足は明らかに弱っていた。一人にはさせられないと家族は心配する一方、母は「一人で大丈夫」と気丈である。

そんな時、ケアマネージャーさんはいたって落ち着いていて、「認定が下りるのは少し先になりますが、取りあえずポータブルトイレを置きましょう。」母の動線を考え、どうしたらつかまりながら安全に歩けるかを提案し、手配してくれた。

あれだけ頑なに拒否し続けた介護保険だったが、認定が下りたら大いに利用し始めた。自宅をバリアフリーにして、手摺を付け、上り下りがし易いよう段差のある所には手摺の階段を借りた。足が弱るのを防ぐ為と、訪問リハビリやデイサービスを利用し、家事支援で自宅での生活を支えてもらった。

「家で死ぬ。施設には入らん！」と長年言い続けていた頑固な母が、あっさり自ら施設で暮らすことを選んだ。度重なる入院で、気が弱ったのだろう。自宅で一人でどう過ごせるか、子供に世話をかけるのではないか、プライドをどう保つか、色々考えての結論だったと思う。

施設の万全のケアの中で、母の体力は回復し、病状も安定した。日々スタッフの皆さんの声かけで刺激をもらい、イベントや食事を楽しんでいる。家族と外出してお茶や食事を楽しむ時の母の笑顔が何より嬉しい。

母が一人暮らしをしていた時のことが、ずっと前のことのように思われる。今、笑顔の中にあっても、体調が良いと「自宅に戻りたい。」と母は寂しげに言う。これでよかったのか私は自分に問う。

加納　率子

ヘルパーだより

NO.40

ヘルパーという職業は、とてもストレスを感じやすい職業だと思います。

それは人対人とのつき合いであること、また自分よりも相手（利用者）の立場に合せて行動することが多々ある職業であること…ヘルパーさんの中には、知らず知らずの内にストレスがたまり、また中にはうつ症状も発症しやすいとも言えます。

さらに、最近は介護を受ける利用者さんにうつ病を持った方も多く、様々な精神の障害となり、その対応に苦慮することが多々あります。

自分のできそうもないことをヘルパーに求める…例えば重い荷物の運搬を特に希望されることがあります。できる範囲ならまだしも、ヘルパーにも、限界があります。1 回ずつ、小分けして運搬するなり、力量に合せて調整していただければいいのですが、一度に大量を希望されたりすると大変です。一度はヘルパーもやってみたものの、長くは続きません。

うつ症状を持ったヘルパーも、まごころでは何人か働いています。急に体調を崩してケアができなくなったりもします。それでも、介護の現場で働いているヘルパーは何より、利用者さんを大事に思い、働き甲斐があるから続けているのだと思います。これからも、信頼の絆を保ってケアできたらと思います。